

後周の将軍[2 趙匡胤]は960年宋を建国した。かれは皇帝への権力集中と、節度使など軍人勢力をおさえ学識のある文人官僚を重用するという[3 文治]政治をすすめた。さらに[4 科擧]の最終選考を皇帝による口頭試問([5 殿試])とするなど整備をすすめ、あらたに台頭してきた[6 地主]階級や富商の子弟を積極的に官吏に登用した。

しかし軍人軽視の姿勢は周辺民族の侵入に対し[7 消極]的な対策をとることを余儀なくし、そのため多くの財源も必要となり財政危機を招く結果ともなった。

- ①宋…960年 後周の武将[8 趙匡胤](太祖)が建国(都[9 開封])→太宗が統一
- ②[10 科擧]の整備=[11 殿試]の制導入
[12 地主]階級などの子弟が官吏に→[13 地主]などの意見が政治に反映するシステムに
以後の中国政治の基本的な形が形成される
- ③対外[14 消極]策…国境を脅かす[15 契丹](遼)や[16 タングート](西夏)と同盟を締結
→銀や絹などを送ることで侵入を防ぐ→その結果、17 財政危機に

周辺民族に対する対外[18 消極]策と防衛力強化は多くの財源を必要とし、財政危機を招いた。これにたいし、11世紀、[19 王安石]は皇帝神宗の支持のもと、[20 農民]や中小商工業者の生活安定・生産増をすすめつつ、経費削減・歳入増をはかるとともに軍事力強化を図るという[21 新法]とよばれる積極的な改革を進めた。しかしこの政策は[22 地主]や[23 大商人]の利益を損なうものであったため、官僚の中には反発も強く、[24 党争]とよばれる官僚間の抗争を招くことになった。

- ④[25 王安石]の改革([26 新法])(11世紀)…皇帝[27 神宗]の支持
- ・青苗法…[28 農民]への穀物などの低利貸し付け
 - ・均輸法…財政の予算化と物資調達合理化
 - ・市易法…[29 中小商工業者]への低利貸し付け
 - ・募役法…免役金をだすことで労役を免除し、その金で希望する農民を雇用した。
 - ・保甲法…兵農一致の民兵制度を導入し強兵をはかる
 - ・保馬法…農民に軍馬を貸し出し、飼育させる
- [30 農民]や中小商工業者の利益を拡大、[31 地主]や[32 大商人]・官僚の利益を損なう
- ↓
- 官僚間の抗争(党争)激化([33 新法]党=王安石派←→[34 旧法]党=反王安石派[35 司馬光]ら)

12世紀、[36 女真]族がたてた[37 金]は、[38 遼]を滅ぼすと華北にも侵入[39 宋]を滅ぼし華北を占領した。([40 靖康]の変)。

これにたいし宋の一族は江南にのがれ[41 臨安]を首都に[42 南宋]を建てた。この国では和平派が[43 岳飛]ら抗戦派をおさえ、金を[44 主君]とする条約を結んだ。この時期、[45 江南]の文化・経済は飛躍的な発達をした。

- ⑤1126、金→華北へ侵入、[46 開封]を占領、皇帝の[47 徽宗]・欽宗父子を捕らえ、[48 宋]を滅ぼす。
風流天子・画家 [49 靖康]の変(1126～27)
- ⑥宋の一族、江南にのがれ[50 南宋]をたてる(首都[51 臨安] 現・杭州)

和平派([52 秦檜])と抗戦派([53 岳飛])の対立→金と条約を結び臣従
国境を[54 淮水]におく
[55 江南]での経済や文化の発展→華北に代わりしだいに江南が中国の中心に

f, 宋代の社会

宋の時代になると経済の急速な発展が見られた。[56 商業]活動の活発化にともない[57 草市]や[58 鎮]とよばれる商業の中心地が生まれた。都市人口も増え、北宋の首都[59 開封]の人口は100万人をこえた。[60 行][61 作]といった同業組合組織がつくられ、大商人が活躍した。大量の[62 銅銭]が鋳造されたがそれでも間に合わず、手形として発生した[63 交子][64 会子]が紙幣として使用された。こうして富裕になったものは土地を集めて[65 地主]となるものも多かった。

南宋の時代になってとくに[66 江南]地方での[67 占城]稲の導入などで水稻耕作が発達、中国の穀倉地帯となった。さらに[68 茶・絹]など商品作物の生産もすすみ、江西省[69 景德鎮]での[70 青磁]・[71 白磁]などの陶磁器生産は有名である。

※宋代、長江下流域での穀物生産を示すことば 72 「江浙熟すれば天下足る」

行=[73 商人]の同業組合、作=[74 手工業者]の同業組合

g, 宋代の文化(1)

- ①宋の文化の特徴=75 外面的な装飾をすて物事の本質に迫ろうとする姿勢
- 文化の担い手=[76 士大夫]や庶民(←唐は[77 貴族]中心)
(↑地主や官僚など[78 儒学]の教養を身につけた知識人)

宋の文化は、前代の唐の文化とは大きく性格を異にしている。まず唐の文化が[79 国際]的であったのに対し、宋は国際環境の影響も受けて[80 民族]主義的性格を強めている。その担い手も没落していった[81 貴族]にかわり、[82 地主]や[83 官僚]といった[84 士大夫]と呼ばれる人々や、都市と経済の発展を背景にした[85 庶民]が中心となっていった。

とくに儒教では、これまでの[86 訓詁学]にかわって、儒教の精神を追求しようという動きが進み、南宋の[87 朱熹]がこれを大成、以後、東アジア各地において大きな影響を与えることになる。また歴史から[88 大義名分]をみいだそうという立場から司馬光が「89 資治通鑑」を著した。

- ②1)儒学=宋学・[90 朱子]学…儒教の精神・本質を明らかにしようとする(←[91 訓詁学][92 周敦頤]「太極図説」(北宋)→程頤・程顥(程子)→[93 朱熹]が大成
- [94 大義名分]論の強調…95 君臣・父子などの区別を重視し社会秩序をただそうとする考え
- [96 華夷]の別を強調、[97 四書]を重視する(←これまでは[98 五経]中心)
- ③歴史…司馬光「99 資治通鑑」、[100 編年]体で叙述、大義名分を説く
時間の流れに沿って歴史を描く、紀伝体(史記など)と対比